ある事になる。實際、ギリシァ又は印度風の不思議に混つてゐる之等の異樣な像を見れば見る程、其の最も眞に近い創作者は、ギリシァ人を父とする美術家で、印度人を母とする佛教徒である歐亞種の彫刻家でなければならなかつた事を、益〻信ずる樣になり、雜種の彫刻、混種の彫刻家を思はしめる。何れにしても、作者がギリシァ人であつたとすれば、假令其の手に西洋の職を持つてゐても、之は確かに歐洲のギリシァ人ではなくて、久しく氣分も東洋化したアジァに居たギリシァ人であつた。更に繰返していへば、作品は純ギリシァ風でもなければ、純印度風でもなく、同時に兩者であり、作品に一種の創意を見る位、解決し難い樣になつてゐる。之を容易な例に依つて比較して見れば、異つた化學的二物質を坩堝で混和すれば、第三の物質が出來るが、此の時に起る樣な事があつたのである。こゝに於て、此の坩堝は正確に何處であつたか。之を決定しなければならぬ。

二

印度ギリシァ風佛像の發生地は、印度の西北境の何處かである事は已に知